

第二百九十二回 青葉会

平成二十二年七月二十二日(木)午後六時〜九時
丸紅一階レストラン「談話室」

〈選者〉 ☆川合万里子 先生

〈出席者〉

伊賀山そらお 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 川口孤舟 小西弘子
 豊田ゆたか 山内天牛
 石川清 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明 宮内規雄 渡邊盛雄
 赤田堅 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 橋口隆 村田くに子 山崎青史(陽亮改め)

紙上選句

《選者吟》

父と子の一輪車漕ぐ夏堤

万里子(堅・紀・猛・弘・龍・敏)

快気祝ぐノンアルコールの麦酒注ぎ

全 (紀・敏・ゆ・隆)

絵日記も描けて白玉冷える頃

全 (恭・忠・敏・青)

(青：白玉食べたさに絵日記を描いている子供の姿が見える)

恋占(こいうら)へ人気集りキャンプの布

全 (隆)

亡きひととあかでこそ在り星祭

全

《互選句》

のらくろの飛び出してくる土用干

孤舟(紀・忠・弘・ゆ・隆・允・青)

六点

☆腕白の水鉄砲に死んでみる

全 (万・堅・猛・弘・允・青)

(青：水鉄砲で死なないことは自明だから「死んでみる」ではあまり面白くない。「死ににけり」としたらどうか)

☆星淡き白夜の湖畔森眠る

ゆたか(万・堅・恭・孤・允・く)

五点

☆恋螢追はれ星座へ紛れ込む

孤舟(万・そ・猛・敏・隆)

☆帰省子の江戸訛りある大阪弁

堂哉(万・堅・ゆ・隆・允)

☆緑蔭へ同化してゆく影二つ

盛雄(万・猛・恭・孤・允)

☆亀売りの亀の子ざらりと空けにけり

弘子(そ・恭・龍・天)

三津五郎の「馬盗人」

三点

大受けの馬の見得きめ夏狂言

紀久男(ゆ・く・天)

☆ばてばての老々一家喜雨の欲し

全 (弘・ゆ・く)

☆今一度母に逢ひたし大夕焼

弘子(万・孤・ゆ)

☆水イチゴの舌見せ合ひて幼などち

恵洲(万・隆・青)

(☆中七→「舌を見せ合ひ」)

(青→「幼らが舌を見せ合ふ水菓子」ではどうか)

浴衣着て声も若やく女人衆

ゆたか(堅・そ・敏)

大極暑急所を狙って鍼を打つ

正明(紀・く・天)

川床の庇になれり若楓

そらお(猛・龍)

(京都・貴船にて)

酷暑避け黒沢映画へ足繁く

猛(紀・敏)

若人で膨らむ駅や花火の夜

恭延(そ・く)

(く：「で」→「の」)

夕焼雲とぼとぼ帰る牛二頭

ゆたか(弘・天)

☆夏藤の奔放許さぬ庭鉢

弘子(堅・猛)

☆朝風に揺れるカーテン子かまきり

規雄(万・孤)

一点

☆ 苦瓜の太り水遣り忙(せわ)しなし 天牛(紀・龍)
☆ 新盆会團十郎の供花(くげ)もあり 全(万・紀)

(四月中旬亡くなられた永山泰子さん)

梅雨明けや漁港に響く鳶の笛 そらお(允)

枯あぢさる剪り終へて日は早頭上 全(龍)

飲みつ振り老いに負けじと暑を払ひ 清(恭)

「楽屋句会」ワープロ依頼

句稿成る友に四日(よっか)の汗強ひて紀久男(忠)

一中節都派演奏会

一中節(いっちゅう)の新橋連中羅(うすもの) 全(天)

夏草は水欲し顔に葉先垂れ 猛(忠)

梅雨明けて眩しき街や池袋 全(そ)

梅雨明けの苦しみならん雨激し 全(青)

(青：夏本番を生みだす陣痛。発想が面白い。天！)

片陰に寄り坂下のポストまで 恭延(青)

(青：奇を衒わない簡明な句。「に寄り」は「に浴い」がいい)

☆ ガラスごし腹の白さや雨蛙 忠彦(万)

電車行く青田の中を音残し 全(恭)

南総で蛸の酔の物半夏生(はんげしょう) 全(天)

水鉄砲本気になって涙目に 全(そ)

八十八年生きて昏昏ねむの花 弘子(忠)

瑠璃の羽残して今朝の黄金虫 全(く)

五百羅漢に寝姿ひとり夏木立 恵洲(孤)

(川越の喜多院)

☆ 龍馬伝閉ぢて小庭へ夜の秋 堂哉(孤)

目覚しは老鶯つむぐ愛の歌 ゆたか(万)

☆ 朝涼(あさすず)の中なる読書「夏の花」 規雄(忠)

(広島で被爆した原民喜の短編小説)

花合ねむ飲らっきの落暉の匂ひしてゐたり ?(弘)

父存命なら百二才雲の峰 盛雄(龍)

● 次回青葉会

八月二十六日(木) 午後六時〜九時 丸紅一階(談話室) 25周年記念

▲ 九月二十四日(金) 全 当季雑詠各自五句。投句は二句

以上文責 紀久男

第二百九十二回青葉会後記（平成二十二年七月）

一、今回は久しぶりのそらおさん始め10名出席。投句6名。前回高得点のそらおさん忠彦さんが秋田の銘酒。先生がお手製のつまみ、弘子さんがチーズサンドを寄贈され。例によって例の如く大いに呑んで食つての句会となりました。

孤舟さん持参の『俳壇』7月号・・孤舟さん寄稿の小澤克己追悼文掲載と小生持参の「句集ひとまく」(西村和子指導。歌舞伎ひとまく会合同句集)を回覧。

そらおさん初の司会で御覧のように孤舟さんが断トツの好成績でした。

当日の話題

(一) 正明さん心臓の検査 (二) 石井好子と巴里祭 (三) 往年のフランス名画 (四) 恵洲さん社友会世話役代表就任等々

二、七月下旬の三日間、村岡英樹さん、佐野明彦さん、田中祐輔さん三先輩宅弔問。後日、明彦さんの留守宅を預つておられる妹さんより御丁寧なるお手紙と最後の句会記録(北野坂句会。遺作と追悼句)届きましたので御披露申し上げます

(病室のテーブルの上に遺されていた二句)
フィンランドイア傾聴す憲法記念日 明彦
みどりの日ひねもす点滴治療受く 全

三、白足袋と扇子身につけ天国へ 永田美智子さん(妹さん)
丸紅俳句部を永らく指導してこられた真下ますじ(『玉藻』同人)。丸紅取引先である日本農産工業の会長)さんが三月九十二歳で亡くなられた由。くに子さんから連絡頂きました。昭和50年代に休部となつてからも年一回、女性部員らが鎌倉で句会(虚子・立子記念館。星野椿も参加)を催し、指導頂いておられたそうで、最近の句会記録や『春潮』4月号等、作品を送つてこられましたので、その一端を借越ながら御紹介します。

萍(うきくさ)に目高の雨の一と日かな 一と筋の日差し萍紅葉浮き
風少し出て来し午後や竹の春 凍雲の日を呑む如く広がり来

四、大谷戸の灯ともし頃を春の雪
伊丹在住の盛雄さんから「大阪俳人クラブ会報」126号の寄贈あり。掲載された寄稿文に25年前日航機御巢鷹山墜落事故のことが書かれてあり、満席で15分後の全日空機を予約し難を免れた話等々。最後に一句「喜寿などは序二段くらす松の芯」

五、関係者近詠
稚木から櫛並木の新緑に 万里 父母(ちはは)の遺骨並びて麦の秋 規雄
ふるさとの粽解きつつ傘寿会 全

反抗期の逃げたき手を引き子供の日 眞希 朝涼や石畳ぬれ坂の町 くに子
海峽薄暑観客一人の紙芝居 全 暮石(いし)音の涼しく響く午後なりけり 允章
さつと席譲るセーラー服若葉風 全 猩猩に纏ひ付きくる藪蚊かな 全

朧月更に黄砂にかすみけり 和夫 ページ繰る音のかそけき夜の秋 全
老の春初見参の亀と孫 全 またぞろの昔話やどぜう鍋 堂哉
『萬緑』8月号 一 螢火の仮名文字のごと揺蕩ひぬ 全
一湾に巨船轟き雲の峰 全

本音詠もうと苦吟のあげく最後はいつもの一夜漬け 恵洲
〔NHKラジオ折込都々逸〕ほく・さ・い(今年北齋生誕二百五十年の由)

平成二十二年八月十二日 紀久男記